町長ひとりごと ⑮

斉藤 譲

最近のテレビを見ていると、違り切れない気持ちになってくる。

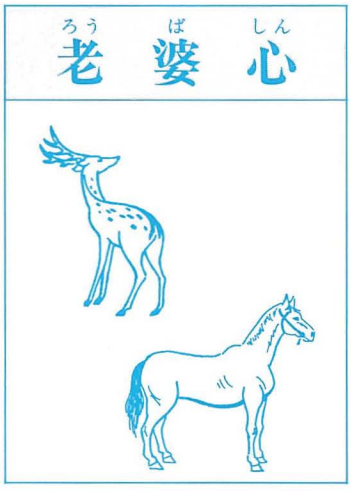
チャンネルをまわせば、あっちもこっちも低俗なドタバタクイズのオンパレード。そしてグルメ指向だか何だかしらないが、やたらとラーメン屋や料亭、旅館などをめぐり歩いては、レポーターなるタレントは異口同音に、「おいしい！」を連発する。まさに金太郎飴の如き代り映えのない薄っぺらな感じのする番組がいかに多いことか。おまけに、素晴らしい番組だなと感動すれば、後になって「ヤラセ」が入っていたとくる。

いま日本中が、不景気で大騒ぎをし、国の景気対策が焦眉の急となっているとき、国会は証人喚問をめぐって長い期間空転を続け、ようやく再開されたと思えば、肝心の予算審議はそっちのけで、まるで検察官気取りの先生方が金丸脱税問題などのような疑惑事件ばかりに質問を集中している変てこりんな予算委員会の風景もたまには放映される。

▼もっとも、これはテレビ局の責任ではなく、国会の責任である。いまテレビ局は、証人喚問の放送規制に文句をいい、喚問を受ける者の人権よりも、知らせる権利の方がより重いと主張している。テレビが社会の公器だというならば、こんな主張をする前に国会の各委員会等の審議中継を増やしたり、特に重要な予算委員会の審議については、国民にわかりやすい本来の予算審議を展開すべきだとなぜ主張しないのであろうか。私には、いまのテレビ報道の方向が、大衆うけのする皮相的な面に多く向けられ、真に日本の将来を憂える心が欠落し、迫真の主張が欠けているような気がしてならない。

曽つて、評論家の大宅壮一氏が、テレビの普及した日本の将来を予見して、「一億総白痴の時代になる」と警鐘を鳴らした。私は、不幸にしてこの予見が、的中しているように思える。人は反論するかもしれない。「いやなら見なければいいではないか、それを楽しみにしている人も多勢いるのだから」と。たしかに視聴者は多様であり、価値観も趣向も万別であるから、いちがいには低俗だとか、皮相的だと断定することは危険であるが、それは極く普通の常識からみた、程度の問題である。

▼特に言いたいことは、電波は総て国の管理下におかれ、テレビ電波も公共目的でその利用が許可されているはずである。町がいま利用している防災行政無線も同様で、その使用にあたっては厳しい制限がつけられている。以前、有線放送でこの予見が、的中しているように思える。人は反論するかもしれない。「いやなら見なければいいではないか、それを楽しみにしている人も多勢いるのだから」と。たしかに視聴者は多様であり、価値観も趣向も万



迷い犬のお知らせをしていたことがあったが、無線になってからは、これすらできなくなった。先日の知事選挙の際、ある自治体では棄権防止を訴えようとしたところ、問題があるという話がでたということも聞いた。実際には利用したようであるが、このように地方公共団体が利用する防災行政無線には、厳しい時間と放送内容の制限がつけられているのである。

これに比べて、テレビはどうであろうか。四六時中といえるほど長時間に亘って公共電波を自由に使用できる立場にあるのであるから、番組内容も自ら厳しく律してゆく姿勢が求められるのも当然のことである。

とに角、テレビはいま家庭の主役の座を占めている。それ故に視聴者に与える影響は、計り知れないほど大きい。いま日本は、心豊かな生活大国を目指そうとしている。いや、是が非でもそうしなければならない。国際化の波にもまれ、もがき漂う島民日本人の進路を、いまこそテレビが灯台の光となってそれを示し、導いて欲しいものだ。

▼中国の古いことばに、「鹿を指して馬と為す」という諺がある。

秦の始皇帝が亡くなったとき、宦官の趙高は後継者となるべき長子の扶蘇を計略によって自害させ、暗愚の末子の胡亥を帝位につけさせた。趙高は権力を思いのままにし、更に二世皇帝にかわって自ら帝位につこうとする野望を持った。そこで群臣が自らに従うかどうかそれを試した。趙高は二世皇帝に鹿を献上して、「これは馬でございます」といった。二世皇帝はこれは鹿の間違いだと居並ぶ群臣に問いかけた。ある者は口をつぐんだまま答えず、ある者は「馬でございます」といって趙高におもねり、ある者は正直に「鹿でございます」と答えた。趙高はその時鹿と答えたものを、後に口実を設けてつぎつぎに粛清していった。

老婆心ながら、天下の公器が趙高の如き存在にならんことを、ましてやこれにおもねて馬と言う国民、鹿とも馬とも区別のできない白痴のような国民の養成媒体と決してならぬことをこいねがっている。